HOKUGA 北海学園学術情報リポジトリ
学校法人北海学園
北海学園大学
北海商科大学

タイトル	回憶 ― 教養部時代を中心に
著者	大谷，通順; OTANI，Michiyori
引用	北海学園大学学園論集(193): iii- x
発行日	2024-03-27

Hokkai-Gakuen Organization of Knowledge Ubiquitous through Gaining Archives.

回憶 ── 教養部時代を中心に

大　谷　通　順

私は教養部に 9 年間，人文学部に 26 年間，つごう 35 年間，北海学園大学に籍をおきました。こうしてみると教養部時代は在籍期間の 4 分の 1 あまりにすぎないのですが，一般教育外国語教員という役割は採用以来変わっておらず，私の基本的な立場は教養部時代からの流れに沿ったものです。そこで本稿では，私の教員生活の原点となる当時を中心にいささか回憶させていただきたいと思います。

1．着任の想い出

元号が「平成」にかわった 1989 年，私は教養部に着任しました。2 月の理事長面接で故森本正夫前理事長が開口一番，「大喪儀の会場は寒かった」といわれたのが印象的でした（その意図は不明ですが)。私はそれまでの 3 年間，中国語の非常勤講師として学園大の学生たちとも親しく交わっていましたし，また本務校の北大文学部では，恩師たちに将来の志望をたずねられると，決まって「大学教員ならば教養部」と公言していましたので，願ってもない就職先でした。恥ずかしながらその志望の理由を明かすと，北大教養部では中野美代子先生や故内藤剛介先生が，自由で華やかな言論活動をくりひろげられているのに，学部では故大島正二先生や故丸尾常喜先生が，それぞれ中国音韻学と魯迅文学の大家でありながら，私のような愚鈍な学生のために論文指導で日々苦悩されているように見えたからなのです（教養部教員にも別の苦労があることを，のちになって思い知ることになりましたが……)。

この年はもうひとつの出来事により，忘れがたい年となりました。天安門事件です。妻は 2 月末から長男出産のため北京の実家に帰っていましたが，5 月中旬に戒厳令が出されて以来，連日，天安門に泊まり込む人々と，市街を包囲する兵士の映像がテレビに流れ，現地の不穏な空気が伝わってきました。6 月に入って突然，北京の家族と電話が通じなくなりました。6 月 3 日(土)，1 講目の授業後，文学史の調べものをしていて，ふと学生の「暴動」に関する記事が目に入ったような気がしたのですが，見なおすと，もうありません。ひどく胸騒ぎがして，夕方まで研究室じゅうの書籍をひっくりかえしたのですが，結局見つかりませんでした。翌日 6 月 4 日の朝，「血の日曜日」報道を見て，はたと気づきました。あの幻の記事は，じつは記憶のなかにあった魯迅のエッセイ「花なき薔薇の二」だったのです。それは段祺瑞政権による天安門デモ隊の虐殺を糾

弾したもので，なんと私の胸騒ぎは現実のものとなってしまったのです。つくづく思い知りました。60 年以上たっても為政者はこのようにやすやすと実弾で若者たちを血みどろにできるのだと。

── それからの数日は，生涯で二度と経験することがないであろうほど気をもみました。さいわい事件の 3 日後に妻から電話があって，日本に避難する臨時便の航空券を入手したと知り，ようやく胸をなでおろしました。出産は 2 週間後に迫っていました。帰国後，長男は無事に生まれましたが，妻の腹の中でさんざん耳にした銃声におびえたか，10 日遅れの誕生となりました。時の流れは速いもので，この長男も本年 7 月に中国の厦門大学に赴任し，教鞭をとっています。

2．教養部での教育

私が着任する 1 年まえから，学園大は北京理工大学への学生派遣をはじめていましたが，上述の天安門事件のせいですべては振り出しにもどりました。新学期から進行していた第 2 回派遣団の事前学習も取りやめとなり，学生たちの落胆ぶりは可哀想そうなほどでした。その後，われわれの訴えも空しく，北京理工大学語学研修の公的再開は 34 年間にわたって学校法人の反対に遭いつづけ，やむをえず「中国語研究会（同好会・愛好会）」あるいは中国語担当教員指導の「私的」課外活動という便法をとらざるをえませんでした。ところが昨年，かたじけなくも安酸敏眞前学長のもとで正式に覚書が結ばれ，ようやく公的な派遣が復活しました。学習に熱心な学生たちに代わって心から感謝を申しあげたいと思います。

さて，上記の海外語学研修のほか，教養部改革の一環として，(1) 言語運用能力の養成に力を入れた 30 名以下のクラス編成，(2) 3 年次（学部移行後の学生）向けクラスの創設，(3) 同好会を利用した課外活動の充実など，学園大の中国語教育にはめざましい動きがみられました。それらすべてを発案し，推進したのは，故城谷武男先生です。そのすさまじいエネルギーと個性は多くの学生を中国語学習へと導きました。また先生の推薦がなければ，私のように貧弱な業績しかもたぬ助手は学園大に採用されることもなかったでしょう。着任して半年間，私は文字どおり「城谷塾」の書生としてその教育の理論と実践を学びました。毎週月曜日 10：00 に先生の研究室で 2 時間ほどの講釈をうけ，当時学生会館 2 階にあった教員用カフェテリアでいっしょに昼食をとったあと，午後の授業にのぞむ，というのが 1 週間のスタートでした。正直をいうと，理論学習のために読まされた『斉藤喜博全集』にはあまり興味がもてませんでしたが，学園大の中国語カリキュラムや同好会活動が，斉藤のいう「学習主体の形成」を主目的として細心の設計がなされていること，またその運営のために城谷先生が大量の時間と精力を投下していることはよく理解できました。結局，この「城谷塾」での修業が私の北海学園大学での働き方を決定したといえます。

授業のほかに同好会に入ってまで中国語を学ぼうという学生たちは，さすがにみな熱意にあふれ，誠実で，また教えられたことを身につけようと懸命に努力する者ばかりでした。したがって夏・冬の合宿，検定試験向けの特訓，中国映画鑑賞，餃子や団子の調理実習，読書会など，彼ら

を相手としたあらゆる指導活動はそのしがいがありました。その後，1993 年に彼らは OB 会を結成し，城谷先生から「時習会」という呼称を授かりました。『論語』「学而」の「学びて時にこれを習う，またよろこばしからずや」にちなみます。名簿に名を並べる会員は学園大に中国語科目が開設された 1983 年の第 1 期生にさかのぼり，何か大きな行事があるたびに会長の呼びかけに応えて集まります。コロナ禍明けの本年はお盆休みに，中国語科目設立 40 周年と私の退職を記念して，日本の各地や，遠く上海から，合計 30 名あまりの卒業生が集まり，久しぶりに元気な顔を見せてくれました。教師冥利につきます。

3．はんぱもの

こうした充実感とはうらはらに，失意を感じる瞬間のあったこと，しかもそれがまれではなく，しばしば発生したことも白状しなければなりません。その原因をつきつめれば，ひっきょう私が「はんぱもの」だったからにほかなりません。1 日は 24 時間しかありません。また，私の能力にも限界があります（否，人並み以下というべきでしょう）。教育に費やすものが増えるいっぽうで自身の研究は痩せ細っていったのです。

もちろん高校出たての子供たちを相手とする教養部でも，決して教員の研究をおろそかにしていたわけではありません。『学園論集』はいつでも投稿者に門戸を開いていましたし（原稿料つきで），不定期開催の「学術研究報告会」は各人の専門を披露する絶好の機会でした。また，教員の研究を教育に活き活きとむすびつけた「教養ゼミ（人文科学演習）」も毎年複数タイトルが開講されていました。しかし「はんぱもの」の私にとって，それらに注ぐことのできるリソースの割合は，多くの校務と語学関連業務に押されて，どうしても量的に少なくならざるをえなかったのです。また質的な面でも，門外漢にも高度な内容をわかりやすく伝えるのが教養教育の真価だとばかりに気ばってみたのですが，「はんぱもの」の私にとっては，結局，入門レベルを大きく超えることが困難だったのです。ましてや教育内容と自身の最新の研究課題とを橋渡しするなどはほぼ不可能でした。

教養部の末期に，私は開設されたばかりの人文学部のために通年で「中国文学」を講じ，教養部解散後は人文学部に移籍しました。学部に温かく迎え入れていただいてからは，おそらく英語以外の外国語教員として唯一の例でしょうが，専門ゼミと卒論指導にも数年間あたりました。その間も，あいかわらず「はんぱもの」の悲しさで，要領がわからず，履修者たちにはずいぶん無理を言ったのではないかと後悔しています。結局，在籍中にこの問題を解消することはおろか，どこか折り合いをつけるところにまでも至りませんでした。

以上のように非力な私でしたが，多くの同僚と事務職員の方々に助けられたおかげで，35 年間にわたる教員としての任を不十分ながらも果たすことができたのではないかと思います。皆さまのご厚誼とご指導・ご協力に対し，心より御礼申しあげます。

履　歴　書

大　谷　通　順（おおたに・みちより）　1956 年 2 月 13 日生まれ

学歴

1975 年 4 月　北海道大学文類入学
1979 年 3 月　北海道大学文学部文学科卒業（文学士）
1979 年 4 月　北海道大学大学院文学研究科修士課程中国文学専攻入学
1982 年 3 月　北海道大学大学院文学研究科修士課程中国文学専攻修了（文学修士）
1982 年 4 月　北海道大学大学院文学研究科博士課程中国文学専攻入学
1982 年 9 月　中華人民共和国北京師範大学中文系留学（中国政府奨学金高級進修生）　～1984 年 7 月
1985 年 7 月　北海道大学大学院文学研究科博士課程中国文学専攻中退

職歴

1980 年 4 月　札幌商科大学非常勤講師（中国語）　～1982 年 7 月
1985 年 4 月　株式会社ホビージャパン企画部（ゲーム類の輸入・開発・関連出版）　～1986 年 3 月
1986 年 4 月　文部教官　北海道大学助手（文学部）　～1989 年 3 月
1986 年 4 月　北海学園大学教養部非常勤講師（中国語）　～1989 年 3 月
1989 年 4 月　北海学園大学教養部講師　～1992 年 3 月
1992 年 4 月　北海学園大学教養部助教授　～1997 年 3 月
1992 年 4 月　長期出張：北京日本学研究センター主任教授補佐　～1993 年 3 月
1997 年 4 月　北海学園大学教養部教授　～1998 年 3 月
1998 年 4 月　北海学園大学人文学部教授　～現在に至る
2006 年 4 月　北海学園大学大学院文学研究科教授　～現在に至る
2017 年 4 月　北海学園大学附属図書館長兼任　～2022 年 3 月

担当科目

一般教育科目：中国語基礎Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ，中国語文化Ⅰ，中国語文化演習Ⅰ・Ⅱ，中国語言語文化演習Ⅰ・Ⅱ，世界の言語と文化，教養ゼミ
専　門　科　目：人文学基礎演習，人文学演習，中国文学Ⅱ
大 学 院 科 目：比較文学特殊講義，比較文学特殊講義演習，日本言語・思想文化論文指導特殊演習

学内委員（主なもの）

共通教育委員長，国際交流委員会中国協定校委員長，協議会委員，入試委員，学生委員，教務委員，全学カリキュラム委員，学術研究会委員など

所属学会

日本中国学会，中国人文学会，The International Playing-Card Society

主な研究業績

著書（単著）

1．『麻雀の誕生』2016 年 9 月，大修館書店

著書（共著）

1．『魯迅文言語彙索引』1981 年 3 月，「東洋学文献センター叢刊」第 36 輯，東京大学東洋文化研究所附属文献センター
2．宮田登・馬興国［主編］『中日文化交流史大系』〔5〕民俗巻，2006 年 11 月，浙江人民出版社【「第八章（一）博戯民俗：叮叮鈴与麻将」，409～424 頁（馬躍［訳］）】
3．呉俊［編訳］『東洋文論 ── 日本現代中国文学論』2008 年 8 月，浙江人民出版社【「《月界旅行》和《地底旅行》── 従中所表現的牢獄脱出形象」，115～132 頁】
4．宮田登・馬興国［編］『日中文化交流史叢書』第 5 巻　民俗，2008 年 11 月，大修館書店【「第九章　近代における中国博戯の伝来と日本的変容 ── チンチロリンと麻雀を例として」，477～500 頁】
5．北海学園大学「英語以外の外国語スタッフ」［編著］『ドイツ，フランス，中国，ロシアとその周辺地域の言語と文化』「中国（第 4 分冊）」2004 年 3 月，共同文化社【「中国語とはどんな言語か？」，9～21 頁】
6．北海学園大学「英語以外の外国語スタッフ」［編著］『ドイツ，フランス，中国，ロシア，韓国・朝鮮とその周辺地域の言語と文化　改訂版』2013 年 3 月，共同文化社【「中国語の音声的特徴」── 抑揚」・「中国語の「形音義」」・「変貌する中国語」，127～142 頁】

翻訳

1．ウー・ホン『北京をつくりなおす ── 政治空間としての天安門広場』2015 年 10 月，国書刊行会【中野美代子［監訳・解説］】

論文

1．「魯迅訳『月界旅行』と『地底旅行』── そこに表われた牢獄脱出のイメージについて」1983 年 10 月，『日本中国学会報』第 35 集，日本中国学会，219～231 頁
2．「馬掉牌考」1989 年 9 月，『北海道大学文学部紀要』38 ノ 1，北海道大学文学部，89～246 頁
3．「五木の形状と樗蒲の遊戯法について―『五木經』の合理的解釈―（上）」1990 年 12 月，『学園論集』第 67 号，北海学園大学学術研究会，35～90 頁
4．「五木の形状と樗蒲の遊戯法について―『五木經』の合理的解釈―（下）」1991 年 3 月，『学園論集』第 68 号，北海学園大学学術研究会，45～88 頁

5．「朝鮮式カルタ「鬪牋」のもつ意味―ある賭博法の起源とその伝播―(上)」1992 年 3 月，『学園論集』第 71 号，北海学園大学学術研究会，31～107 頁
6．「朝鮮式カルタ「鬪牋」のもつ意味―ある賭博法の起源とその伝播―(中)」1992 年 12 月，『学園論集』第 74 号，北海学園大学学術研究会，31～71 頁
7．「「波斯国」人と「穿心国」人 ── 明・清代の異民族朝貢テーマ」1996 年 6 月，『学園論集』第 88 号，北海学園大学学術研究会，15～38 頁
8．「波斯進宝的形象 ── 与財神像的関係」2001 年 11 月，『元代文化研究』第一輯，北京師範大学古籍所［編］，北京師範大学出版社，128～143 頁
9．「中国古代游戯“樗蒲”在世界游戯上的定位」2000 年 9 月，『新世紀文化交流与対外漢語教学国際学術研討会論文集』，会議組委会［編］，北京理工大学，21～27 頁
10.「ポタラ宮壁画に描かれたチベット伝統ゲーム」2003 年 3 月，『人文論集』第 23・24 合併号，北海学園大学人文学部，293～347 頁
11.「元雜劇所描寫關撲風俗 ── 擲錢賭博的文化含義」2007 年 11 月，『中國傳統文化與元代文獻國際學術研討會會議論文集（會上交流）』北京師範大學古籍研究所・北京大學中國古文獻研究中心・《全元文》編委會・《全元詩》課題組，264～273 頁
12.「元雜劇所描寫關撲風俗 ── 擲錢賭博的文化含義」2009 年 3 月，『中國傳統文化與元代文獻國際學術研討會會議論文集』，北京師範大學古籍研究所［編］，中華書局，597～612 頁
13.「《金瓶梅》與骰牌遊戯 ── 小説裏賭博風俗描寫之作用」2010 年 6 月，朱鴻林［編］『首屆中國古文獻與傳統文化國際學術研討會論文彙編』，香港理工大學中國文化學系，421～431 頁
14.「継承日本前人的研究成果，再考中国古代博戯樗蒲」2011 年 10 月，『第二屆中國古文獻與傳統文化國際學術研討會會議論文集』，北京師範大學古籍與傳統文化研究所・中國社會科學院歴史研究所・香港理工大學中國文化學系，477～502 頁
15.「骨牌博戯『同棋』── 清末民初におけるその社会的・文化的位置づけ（上）」2012 年 3 月，『人文論集』第 51 号，北海学園大学人文学会，29～60 頁
16.「故宮博物院の完全なる馬吊牌（上）」2014 年 3 月，『学園論集』第 159 号，北海学園大学学術研究会，1～45 頁
17.「故宮博物院の完全なる馬吊牌（中）」2014 年 9 月，『学園論集』第 161 号，北海学園大学学術研究会，29～64 頁

教科書（共著）

1．『ほあんいん！中国語〈基礎篇〉』2012 年 4 月，郁文堂
2．『ほあんいん！中国語〈基礎篇〉改訂版』2015 年 4 月，郁文堂

口頭発表

1．「鏡像としての中国」1991 年 6 月・11 月，北海学園大学総合科学特別講義「北海道論」
2．「中国のギャンブルゲーム」1992 年 6 月，北京日本学研究センター第 11 回公開講座
3．「中国的博戯与日本」1992 年 8 月，中国中日関係史学会・北京市中日関係史研究会・北京市中日園林芸術文化交流協会「学術報告会」
4．「維吾爾族的特殊紙牌」1994 年 8 月，'94 糸綢之路古代体育国際学術研討会 1st Session
5．「継承日本前人的研究成果，再考中国古代博戯樗蒲」1994 年 8 月，'94 糸綢之路古代体育国際学術研討会 2nd Session
6．「馬掉牌研究中的幾個問題」1994 年 8 月，'94 糸綢之路古代体育国際学術研討会 3rd Session
7．「家族・友人としての中国人」1998 年 10 月，北海学園大学人文学部第 6 回市民公開講座「ニュースの裏を読む」
8．「波斯進宝的形象 ── 与財神像的関係」1998 年 9 月，北京師範大学古籍所・中国元史研究会・書目文献出版社「元代文化国際学術研討会」
9．「中国の子供と日本の子供 ── 両国のしつけの違い」2001 年 10 月，北海学園大学人文学部第 96 回市民公開講座「文化の壁を越えて」
10．「元雑劇所描寫的關撲風俗 ── 擲錢賭博的文化含義」2007 年 11 月，北京師範大学古籍研究所・北京大学中国古文献研究中心・《全元文》編委会・《全元詩》課題組「中国伝統文化与元代文献国際学術研討会」
11．「中国の伝統ゲーム～「骰」と「牌」の背景にある原理」2008 年 3 月，第 7 回札幌大学孔子学院講演会
12．「《金瓶梅》與骰牌遊戯 ── 小説裏賭博風俗描寫之作用」2010 年 6 月，香港理工大學中國文化學系・中國社會科學院歴史研究所・北京師範大學古籍與傳統文化研究院「首屆中國古文獻與傳統文化國際學術研討會」
13．「中国の父親像」2012 年 10 月，2012 年度北海学園大学市民公開講座「世界の言語と文化のモザイクを眺める」
14．「中国を知り，知らせること―『支那通』井上紅梅の軌跡―」2012 年 10 月，第 20 回札幌大学孔子学院講演会
15．「中国の父親像」2013 年 3 月，札幌商工会議所平成 24 年度第 3 回札幌市内中国語通訳者懇親会
16．「故宮博物院裏的一副完整的馬吊牌」2013 年 5 月，北京師範大学研究生学術論壇“治学・修身”系列講座，北京師範大学古籍与伝統文化研究院
17．「日本図書館漢籍使用」2013 年 6 月，北京師範大学古籍与伝統文化研究院
18．「麻雀で中国語」2015 年 6 月，2015 年度北海学園大学市民公開講座「世界の言語と文化のモザイクを眺める」

19. 「麻雀で中国語」2018 年 6 月，2018 年度北海学園大学市民公開講座「世界の言語と文化のモザイクを眺める」
20. 「『麻雀の誕生』を語る」2019 年 11 月，北海学園大学人文学部第 22 回「人文学の挑戦」

その他

1．「中国的博戯与日本」1992 年 9 月，『中日関係史研究』1992 年第 3 期（総第 28 期），中日関係史学会・北京市中日関係史研究会，84～90 頁【徐一平［通訳］・徐蒙［整理］】
2．「江戸がアレンジした中国の遊び ── 酒席の余興「鳥さし」」1993 年 10 月，『しにか』第 4 巻第 10 号，大修館書店，28～31 頁
3．「樗蒲質疑」1993 年 12 月，『文史知識』1993 年第 2 期（総第 140 期），中華書局，104～105 頁
4．「『游戯大観』──「近代的」あそびの百科」1996 年 12 月，『しにか』第 7 巻第 12 号，大修館書店，72～77 頁
5．共著：君島東彦［編］『留学の達人』，1997 年 5 月，増進会出版社【「北京回憶＊中国」11～23 頁，「留学ブックガイド」243 頁】
6．書評：大室幹雄『遊蕩都市―中世中国の神話・笑劇・風景』1997 年 6 月，『しにか』第 8 巻第 6 号，大修館書店，110～111 頁
7．「中国人民革命軍事博物館」1998 年 1 月，『しにか』第 9 巻第 1 号，大修館書店，22～23 頁
8．「『淵鑑類函』」1998 年 3 月，『しにか』第 9 巻第 3 号，大修館書店，70 頁～74 頁
9．「囲碁」2000 年 5 月，『しにか』第 11 巻第 5 号，大修館書店，14～15 頁
10. 「麻雀」2000 年 5 月，『しにか』第 11 巻第 5 号，大修館書店，74～75 頁
11. 共著：「中国では，子供もきちんと漢字が書けるか」2000 年 6 月，『しにか』第 11 巻第 6 号，68～69 頁
12. “Translation of the Rules of Ma Diao (Letters to the Editor)”2001 年 5 / 6 月，THE PLAYING-CARD: Journal of The International Playing-Card Society, Volume XXIX No.6, 2001, The International Playing-Card Society，214～215 頁
13. 「複雑な牌ゲーム」2001 年 8 月，『週間朝日百科　世界の文学』106 号，朝日新聞出版局，185 頁
14. 書評：「新刊紹介　武田雅哉・林久之著『中国科学幻想文学館』上・下」2004 年 2 月，『漢文教室』第 188 号，大修館書店，39 頁
15. 分担執筆：武田雅哉・加部勇一郎・田村容子［編著］『中国文化 55 のキーワード』2016 年 4 月，ミネルヴァ書房【「賭博 ── 運命とのたわむれ」204～207 頁】
16. 分担執筆：武田雅哉・加部勇一郎・田村容子［編著］『中国文学をつまみ食い ──『詩経』から『三体』まで』2022 年 2 月，ミネルヴァ書房【「曹雪芹『紅楼夢』」78～79 頁，「韓邦慶『海上花列伝』」88～89 頁】